

佑 啓

ゆうけい

発行所
社会福祉法人 佑啓会
理事長 堀見 吉英
〒290-0265
千葉県市原市今富1110-1
TEL 0436-36-7611
FAX 0436-36-7612
編集者 広報委員会

オールウェイズ「差と別」

三股 金利

遙か五十年前近く前のことなのに、昨日見たドラマのように、呼び起こされる夏の思い出がある。今回は毎日新聞論説委員、野沢さんの講演がスイッチであった。千葉県が全国に先駆けて作った差別をなくす条例が結実するまでの過程のほか、いたいけな子供、自死とその背景にある差別や貧困。詳細な取材に基づいた、差別をされる側の心情から表情までも目に浮かぶような言葉によって。

S君が海で死んだ。小学校二年の夏、待ち望んでいた休日を翌日に控え、女性の担任はみんなに告げた。どんな言葉であったかは定かではない。「明日の午後学校に来なさい」何を意味しているのかよくわからないまま、言われた白いワイシャツとズボンで教室に入ると先生が一人で待っていた。下書きされた「お別れの言葉」を二度ほど練習した後、先生は自転車を押し、私は横に並んで海沿いの集落に向かった。歩いて三十分ほどのその地域に入ると、道には

たくさん人の貝殻が白く光っていた。細かい堆積物だけでなく、窪んだ部分には朝捨てられたような貝も山になっていた。足の下で砕ける音と共に貝が飛びたち、腐りかけた匂いが炎天下にゆらいでいた。小さな棺の中に真っ白な布から目を閉じた顔だけ見えた。練習のとおりに「言葉」を読み進むとお母さんの泣き声は次第に大きくなり、ついには棺に覆い被さるうとし誰かに止められた。

柏ヶ浦の海沿いはアサリや海苔が豊富にとれ景気がよかった。びかびかの瓦屋根が細い道筋に競うように連なっていた。あまり行つたことのない地域へ踏み込んだ印象と初めて経験する人間の死。時には見たことのある葬列からは想像もできなかった内側の出来事。しかし悲しみも寂しさもなかった。どう処理していいか解らなかつた。その場面だけが鮮明に再生される。S君は手と足に障害があり、言葉もたどたどしかった。

掃除の時間は四つん這いで力なく雑巾を握り、片手で拭きながら点々とヨダレの跡を床に残していた。一年ちよつとの友達はず

か七年で生涯を終えた。後で澤にはまって亡くなったのだと知らされた。不自由な体で泳ぎにいったのだろうか。

当時は特別支援学校もなく、特殊学級もなかった。みんな一緒だった。いじめてはいなかった。寂しさを感じていなかった。寂しさを感じながら思い出そうとしても葬儀のこと以外残っていませんでした。



たまたま本屋で野中広務の名前を見つけた。とつた本が、辛淑玉との対談をまとめた、「差別と日本人」だった。二人とも部落出身や在日であることをカミングアウトしている。自らを袋小路に追い込んでいくからそれぞれの論評には重いものがあつた。ここでも思い起こしたのは子どもの頃。

小学校の時に転校してきた友達。は在日だった。なぜそれがわかつたのか不明である。中学生になった時、家を建てたので遊びに来いという。当時自分の部屋があるなんてうらやましかった。ベッドの脇にハンカチ文字の盾が飾られていた。何かと尋ねると自分の国の卓球大会で入賞したと聞かされた。

「自分の国」

聞かなければよかった。タブーはその時に消えたが、彼は遠くの存在になつてしまった。おまえとは違うのだと突き放されたようだ

った。常に自分のルーツを意識せざるを得ない環境に置かれていたのだから。私には国という意識などまったくなかった。

後年、同窓会で再会した。話に出たのは楽しかった当時のことだ。結婚し、日本に帰化しているという。この間どんな人生があったのか。帰化など無縁の生活を送っている人間に触れることはできない。人には付き合ひの濃さによって距離感も必要だから。

もう三十年以上の付き合いになる友人がいる。随分前であるが、私が母一人子一人で育つたと知った時「よくまとともに育つたなあ」と言うのだ。母子家庭はまともに育たない前提のように言われても、内心よくわかっているのに笑ってやり過ごしたが「まとも」にはまいった。些細なことに目くらまを立ててはいけぬ。私はオトナだ。三十年という時間は、もしかすると兄弟よりも長いときあいになるかもしれない。

連中とは悪ガキそのままに時を経ただけなので更に露骨になり、差別用語など表現に神経質になる風潮でさえ「母子家庭は、母子家庭だ」「欠損家庭という言い方もあるな」「それはひどい、でも一人親家庭というのはいちいち説明しなればならぬからかえって面倒」「などと私も気兼ねない会話に同調してしまう。

そんな関係なので、一緒にゴルフなどやるものなら、私がトラブルになつたりすると妙にうれしそう。これもしゃくだが、でも一落

ち着いて「大丈夫、大丈夫」はこ免である。周囲の心配りがゲームをつまらなくしてしまう。相手がハイレベルの人と回ることになると、山に入ったボールでも「ここから打つていいよ」と気遣われ、ミスショットでも「ナイスショット」などと言われたらもう終わりである。ジ・エンド。なんたる疎外感。聞こえのいい言葉で痛いほど傷つけられる。自らの欲と煩悩に負けているところに塩をすり込まれるようなものだ。相手が自分より下手だとわかるとなぜか優しくなるのがゴルフ。それでも練習もせず行き当たりばったり。意志の弱いところを自虐的に楽しむ三日坊主の言い訳。

私は人を悲しませたくない。だからあまり上手にならないことにしている。



問題は差別。人間ある限り無くならないだろう。表面がきれいになつていけばいくほど、差別の現実を知るショックは大きい。制度や社会も変わったように見えて、実は根の部分では何も変わっていないことに直面する。もつと本音で語らないと、核心に触れないまま、本質を見失いかねない。たぶん差別をなくす条例の策定過程で野沢さんが経験したようなぶつかり合いがなければ冷めたまま無視されるのだから。そうなるという議論が必要だ。よいところは自分の存在が反対意見によって浮き彫りになるところ。悪いところは、議論に食っただけなのに自分

の存在がなくなつたように考え

てしまうこと。

器用に生き、紛争を避け、誰にも邪魔されずに生活すること。力をそそいでいる現代人。人との関係は希薄である。それなのに他人同士がネット上で知り合い一緒に自殺などという現象が起きている。結局人は人を求め、自分の存在を意味するものとして自覚でき、あるいは認められることがなければ生きていけないのだ。

障害のない私も客観的に自分を眺められるようになった瞬間から、周囲の空気が変わったように感じた。家族に触れそうなのから避けて通り、自分からバリアを張り巡らせ、埋没することを望んだ。安心の反面、自分の存在が薄れていく寂しさも頭をもたげた。普通という領域はなんと高いハードルなのか。そう思ってしまった。

みんな一緒なんてありはしないのに、みんなと同じ事を求める。しかし同じではまた満足出来ない。だからきれいに対等な関係と言われてもアヤシク感じ

てしまうのだ。

(大塚福祉作業所 所長)

大塚福祉作業所に通いながら、先日はじめてふる里学舎で短期入所を体験された能智淳さんのお母様に原稿を寄せていただきました。



子離れするとき

能智 綾子

四月十九日、初めてのショートステイに、作業所の仲間二人と、淳との三人でふる里学舎へ行くことになりました。

堀金先生が同行して下さいというので安心して行ったものの、初めてということ、一泊二日という時間が長く感じられ、落ちつかなくて時計の針ばかりが気になる始末。

特に金曜日の夜は、テレビのドラえもんやクレヨンしんちゃんを見ながら主題歌に合わせ身体でリズムをとっているいつもの淳の姿はなく、静かに長い夜が過ぎていきます。



ダウン症に生まれて四十四年、一人で歩いている淳を見かける方から、歩道を渡る時しっかりと信号を見て渡っていますよ。と教えてくれています。様々な方に見守られて頂いているようで本当にありがたき思いです。

手を繋いで歩いていると「何年生ですか」と聞かれることもあり、大人になって欲しいと思っても本人は子供だと思っているらしく自分の年齢も言えず「二二」

親が思う程子供たちは・・・と思いつつ、親三人共迎えに行く日は予定時間より早めに現地へ迎えに行っていました。子供たち三人は親の心配などどこ吹く風で、にこやかな顔で親の待つ部屋に入ってきました。先生のお話では、うちの子は思ったよりリラックスしていたとのこと。心配した私の方が子の心細い感じがしたかもしれません。この日ふる里学舎を見学させていた淳でしたが、田園風景のすばらしい環境の中で暮らしている入所者の皆さんは楽しそうに談笑していましたし、すれ違う時の支援員の先生方の笑顔や若々しさがとても心を和ませてくれました。周りの皆さんもそうだと思いますが、私は元気を沢山いただいた帰路につきました。

子供達三人の感想は「楽しかった」「楽しかった」のオウム返しくらいですが、とても明るい表情をしていましたし、行くときは多少戸惑ったかもしれないけれど、学舎の先生方との新しい絆も出来たのではないのでしょうか。七十歳になり身体機能が少々落ちてきた母親としては改めて背筋を伸ばし、子と向き合いたく思っています。親子で初めての体験でしたが、こんな発見もあり、貴重な二日間でした。



六月、二泊三日の二度目には、参加者も八名と賑やかな三日間でした。送り出したものの心配の種は尽きませんが、これから心配の里学舎の支援員の先生方を信頼し、お願いしていこうと思っています。息子には一人では出来ないことが数え切れないほどあり、安心して親元から出すには心細いのですが、親には老いが容赦なくやってきます。どうすれば良いのか迷っ

てばかり、せめて、親子共々明るく楽しく生きていける毎日でありたいもの。二回のショートステイの体験が次に繋がりますよう、子離れ、親離れの一步一步を進んで行こうと思っております。これからどうぞ宜しくお願いいたします。

(大塚福祉作業所 能智淳母)

青い夏

並木 傑

夏は、正直嫌いである。夏生まれの為子供頃は大好きだったが、年を取り体重が増えるのと比例して増える汗の量。海の後のベトベトな感じ、花火大会の人ごみ等どれも不快に感じてしまう。唯一爽快感の一日の締めくくりに生ビールを心の支えにしながら、秋を待つというのが近年の夏の過ごし方である。

そんなことはさておき、ふる里学舎には、夏を象徴する大イベントの「納涼祭」がある。簡単に説明すると、日頃よりお世話になっている地域の皆様や利用者とその家族にふる里学舎でお祭りを楽しんでもらうといった行事である。ただし来場者数が半端ではない。年々増加しており、近年では一五〇人以上の方が来場している。そんな大きな行事だから例年、駐車場の誘導をしつつ陰から祭りの成功を祈り、夜の打ち上げになると表舞台へ出て大騒ぎして、みんなに迷惑をかけてしまうといったものであった。その姿が許せなかつたのか、夏嫌いの私がどうい

ように仰せつかつてしまった。さすがに例年にはないブレッツシャーはあったものの、やはり先輩と一緒という安心感。言われたことをなんとかこなしているうちに無事に納涼祭は終わっていた。しかし世の中そんなに甘くない。反省会のときに「来年から納涼祭は、お前一人で仕切れ」と理事長からの前払いのお言葉。「大変そうですけれど頑張ります。アハハ」と酔いながら返事をしていた。今思うとあの時の私はまだ、あれほどまだ納涼祭で苦しめられることは想像すらしていなかった。

例年納涼祭の準備を始めるのは半年前である。そこから出演団体の交渉、栄養士との模擬店の打ち合わせ、地域の皆様への挨拶回り等行うことが盛りだくさんである。もちろん全て一人で抱え込むことは無理なので各部署に担当職員を決め、実行委員会を立ち上げる。そして実行委員会を中心に細かい準備を進めていくのだが、どういうわけか今年は、山あり谷ありだった。一番頭を悩ませたのがメインとなる歌手の決定である。交渉する歌手はことごとく断られる。こちらが提示した金額を聞き、鼻で笑われた事務所もあった。そんなときに女神が現れた。納涼祭実行委員会のスパーバイザーである課長が大ファンの大場久美子さんである。駄目で元々と連絡をしてみると、すぐに事務所から返事がきた。こちらの条件に多少悩まれたようだが、最終的に大場さんご本人の判断で出演してくれ

ることにになった。これで祭りの成功は間違いないと思っていた矢先に、出演予定の音楽隊のキャンセルが入ってしまった。こうなれば開き直るしかない。無理だといふ皆の制止を振り切り千葉県警の音楽隊に連絡を取つてみた。その結果、翌日にはあつさり出演の了承が取れた。よかった。良いのか悪いのかこういつたことが多かった。

そんなこんなでまだまだ先だと思つていてもあつという間に祭りは近づいてくる。近づくにつれ極度のブレッツシャーにより、起きている間は常に顔は青ざめ、眠ると当日失敗に終わる夢ばかり見るようになる。過去の実行委員長が円形脱毛症になったという伝説があるが、その気持ちは痛いほどわかった。そんな弱つていたときに周囲のありがたさを感じた。挨拶に行つた際に「毎年楽しみにしているよ」と言ってくださる地域の皆様の温かい言葉。誰よりも祭りを楽しみにしている利用者の笑顔。成功に向けて夜遅くまで準備をしてくれる実行委員会を始めとした職員の前線姿。こんなじや駄目だと自分を奮い立たせ、当日を迎えた。



当日は、朝から準備で法人の殆どの職員が参加する。納涼祭が始まるまでボランティアの方達や保護者も手伝ってくれるため、受け入れる側だけで総勢一六〇名ほどになる。実行委員長はその中心とならなければならぬが、今までにそんな経験がなかったため頭が真っ白になりうろたえるばかり。それでも皆自分の役割を理解し的確な行動を取ってくれた。結果的に祭りは大成功。大場久美子さん、千葉県警察音楽隊、千葉明德学園のチアリーディング等の出演団

に会場は大盛り上がり。去年より売り上げを二割増しに見込んだ模擬店は、あつという間に完売。余裕を持っていたはずの駐車場もほぼ満車になった。今年は二〇〇人近くの来場者があった。そして夜の締めくくりにやはり生ビールである。間違いない今までの一番おいしい酒であった。こんな経験は、なかなかできるものではない。人と人の繋がり大切さを強く感じる事が出来た。打ち上げの後半、理事長と話しているとき、私の頭にふと青春という言葉が浮かび口にした。一つの目標に向かってみんなで力を合わせ、様々な試練を乗り越えていく。まさに青春だ。いや、やはり夏だから青春になるのか。青い夏。当日までは、顔色が真っ青になり、終わつてからは青い子供のように、やんちゃになつて酒を飲む。夏が好きだった昔を少し思い出すことができた。「ひと夏の甘酸っぱい経験」でした。

(ふる里学舎 支援員)

編集後記

多くの方々に支えられて、第七十号発行までの道のりを歩んできたことが出来ました。

「人生七十古来稀なり」「七十にして炬を越えず」

むかしから「七十」とは節目というよりも、到達点といった意味合いが強いようですが、なんのなんの、まだまだ通過点です。末永くご愛読の程宜しくお願い申し上げます。

石渡 恵美

